

# 適性検査Ⅰ

## 注 意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立小石川中等教育学校

問題は次のページからです。

# 1 次の「文章1」と「文章2」

（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

## 文章1

「丁大学で植物学の研究をしている本村紗英は、研究室の仲間や出入りの洋食店店員である藤丸陽太とともに、構内の植え込みの一角に植えられているサツマイモの収穫を手伝うことになった。自分もこれまで何度となく目にしてきた植え込みにサツマイモが植えられているとは思ってもなかったことに気づき、本村はもつと植物というものに敏感にならなければ、と考える。」

反省した本村は、しゃがみこんで植え込みのサツマイモの葉を眺めた。地表に近い場所で、大小の葉が一生懸命に太陽へ顔を向けている。ひしめきあいながらも、互いの邪魔にならぬようにということなのか、葉柄の長さはさまざまだ。長い葉柄を持ち、周囲の葉から飛び出したものの。葉柄は短いけれど、ほかの葉のあいだからうまく顔を覗かせているもの。

けなげだ、とつい擬人化して感情移入してしまう。頭がいいなあ、と感心もする。植物に脳はないから、頭もお尻もないわけだが、それでもうまく調和して、生存のための工夫をこらす。人間よりもよっぽど頭がいいなと思うことしきりだ。

だが、植物と人間のあいだの断絶も感じる。本村は人間だから、な

んとなく人間の理屈や感情に引きつけて、植物を解釈しようとする癖が抜けない。けれど、脳も感情もない植物は、本村のそんな思惑とはまったく隔絶したところで、ただ淡々と葉を繁らせ、葉柄の長さを互いに調節し、地中深くへと根をのばす。より多く光と水と養分を取りこみ、次代に命をつなぐために。言葉も表情も身振りも使わずに、人間には推し量りきれない複雑な機構を稼働させて。

そう考えると、どれだけ望んでも本村には永遠に理解できない、気味悪く得体の知れぬ生き物のように、植物が思われてくるのだった。サツマイモの葉っぱのほうは、本村が「ちょっとこわいな」と思っていることなど、もちろんまるで感知していないだろう。これからイモを掘られるとは微塵も予想せず、この瞬間も元気に光合成を行っている様子だ。本村とは少し距離を置き、藤丸もしゃがんでサツマイモの葉を眺めていた。「うお」と藤丸が小さく声を上げたので、本村は顔をそちらに向けた。

「葉っぱの筋がサツマイモの皮の色してる。すげえ」

藤丸は独り言のようにつぶやき、よりいっそう葉に顔を近づけて、何枚かを熱心に見比べている。

本村は手もとの葉を改めて眺めた。言われてみれば、たしかに。ハート型の葉に張りめぐらされた葉脈は、ほのかな臙脂色だった。「こういう色のイモが、土のなかで育ってますよ」と予告するみたいに。

血管のような葉脈を見ていたら、最前感した気味の悪さは薄らいだ。たしかに植物は、ひととはまったくちがう仕組みを持っている。人間の

「常識」が通じない世界を生きている。けれど、同じ地球上で進化してきた生き物だから、当然ながら共通する点も多々あるのだ。

自分の理解が及ばないもの、自分とは異なる部分があるものを、すぐに「気味が悪い」「なんだかこわい」と締めだし遠ざけようとしてしまふのは、私の悪いところだ。うーん、人類全般に通じる、悪いところかもしれない。本村はまたも反省した。人間に感情と思考があるからこそ生じる悪癖だと言えるが、「気味が悪い」「なんだかこわい」という気持ちを乗り越えて、相手を真に理解するために必要なもまた、感情と思考だろう。どうして「私」と「あなた」はちがうのか、分析し受け入れるためには理性と知性が要求される。ちがいを認めあうためには、相手を思いやる感情が不可欠だ。

植物みたいに、脳も愛もない生き物になれば、一番面倒がなくて気楽なんだけど。本村はため息をつく。思考も感情もないはずの植物が、人間よりも他者を受容し、飄々と生きていのように見えるのはなんと皮肉だ。

それにしても、藤丸さんはすごい。と本村は思った。私があうだうだ考えているそばで、藤丸さんはサツマイモの葉っぱをあるがまま受け止め、イモの皮の色がそこに映しだされていることを発見した。なんてのびやかで、でも鋭い観察眼なんだろう。きっと藤丸さんは、だれかを、なにかを、「気味悪い」なんて思わないはずだ。一瞬そう感じることがあったとしても、「いやいや、待てよ」と熱心に観察し、いろいろ考えて、最終的には相手をそのまま受け止めるのだろう。おおらか

で優しいひとだから。  
\*かんたん  
感嘆をこめて藤丸を見てみると、視線に気づいた藤丸が顔を上げ、照れたように笑った。

(三浦しをん「愛なき世界」による)

### [注]

葉柄——葉の一部。柄のように細くなったところ。(図1)

擬人化して——人間以外のものを人間と同じに見立てて。

隔絶した——かけはなれた。

微塵も——すこしも。

葉脈——葉の根もとからこまかく分かれ出て、水分や養

分の通路となっている筋。(図2)

最前——さきほど。さっき。

飄々と——こたわりをもたず、自分のペースで。

感嘆をこめて——感心し、ほめたたえたいような気持ちになって。

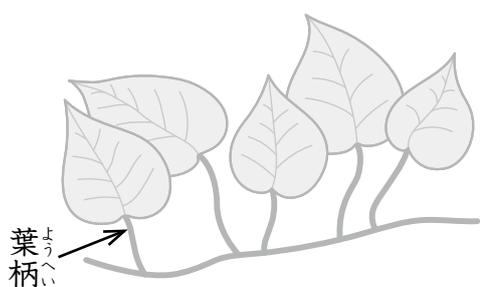


図1

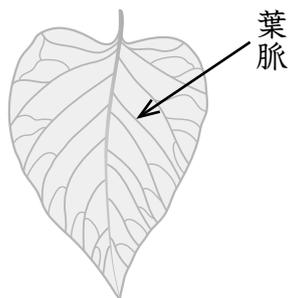


図2

## 文章2

ぼくは昔からガという虫が好きだ。そもそも、なぜ昼間飛はないで夜飛ぶのだろうというところに興味がある。

昼間飛んだらいいじゃないか。暗いと敵がいなくて安全だというのが、夜に出てきてエサを探す敵もいる。暗ければ安全とは決していえないだろう。

実際に、昼間飛ぶガもいる。それは夜飛ぶガの苦勞はしていないはずだ。それでも夜飛ぶなら、昼間飛ぶよりどこがいいのだろう、などと考えているとますますなぜ夜飛ぶのか、わからなくなってくる。

それぞれに、それぞれの生き方があるのだ、といういいかげんな答えしか残らない。

それなりに苦勞しているんだ、としかいいようがない。

しかし、それなりに、どういう苦勞をしているのだろうというところを、いろいろ考えてみるのがおもしろい。それは哲学的な思考実験に似ている。

\* エポフィルスにせよ、ガにせよ、苦勞するには苦勞するだけの原因があり、仕組みがある。それは何かということを探るのだ。

たとえば節足動物は、なぜ節足動物になってしまったか、ということから考える。たまたま祖先がそうだったから、彼らは体節を連ねる外骨格の動物になっていった。

すると体の構造上、頭の中を食道が通り抜けることになり、脳を発達させると食道にしわ寄せがいくようになった。ではどうしたらいいか。

樹液や体液、血液といった液状のエサを採ることにした。それが、その形で何とか生き延びる方法だった。節足動物といういきものは、そういう苦勞をしている。

動物学では、現在の動物の形が必ずしも最善とは考えない。そうならざるをえない原因があり、その形で何とか生きているのだと考える。

なぜそういう格好をしてきているのか、その結果、どういう生き方をしているのか。そういった根本の問題を追究するのが動物学という学問なのだと思う。

いろいろないきものを見ていくと、こんな生き方もできるんだなあ、そのためにはこういう仕組みがあって、こういう苦勞があるのか、なるほど、それでやっと生きていられるのか、ということが、それぞれにわかる。

わかってみると感激する。その形でしか生きていけない理由を、たくさん知れば知るほど感心する。

その感激は、原始的といわれるクラゲのような腔腸動物でも、高等といわれるほ乳類でもまったく同じだ。

このごろ、よく、生物多様性はなぜ大事なのですかと聞かれる。ぼくは、簡単に説明するときはこんなふうにいる。

\* 生態系の豊かさが失われると人間の食べものもなくなり、食べものも、もとは全部いきもので、人間がそれを一から作れるわけではないのですから、いろんなものがいなければいけないのです、と。

ただそれは少し説明を省略したい方で、ほんとうは、あらゆるいきものにはそれぞれに生きる理由があるからだと思っている。

理由がわかって何の役に立つ、といわれれば、別に何の役にも立ちませんよ、というほかない。しかし役に立てるためだったら、こんな格好をしていないほうがいいというものがたくさんある。

人間も、今こういう格好をしているが、それが優れた形かどうかはわからない。これでも生きていけるという説明はつくけれども。

だからこそ動物学では、海の底のいきものも人間も、どちらが進化してどちらが上、という発想をしない。

⑨ いろんないきものの生き方をたくさん勉強するのいいと思う。ぼくはそれでとてもおもしろかったし、そうすることで、不思議に広く深く、静かなもの見方ができるようになるだろう。

いきものは全部、いろいろあるんだな、あっていいんだな、ということになる。つまりそれが、生物多様性ということなのだと思う。

(日高敏隆「世界を、こんなふうに見てごらん」による)

## 〔注〕

思考実験

—— (起こりにくいことが) もし実際に起こったらどうなるか、考えてみることに。

エポファイルス

—— カメモシの仲間。水中に住みながら空気呼吸をする。

節足動物

—— ガヤクモなど、足にたくさん節をもつ動物。体節を連ねる外骨格の動物

—— 体のじくに沿って連なった、からやこうでおおわれている動物。

動物。

腔腸動物

—— クラゲやサンゴなど、口から体内までの空所をもつ、かさやつつのような形をした水中の動物。

生物多様性

—— いろいろなちがった種類の生物が存在すること。

生態系

—— 生物とまわりの環境とから成り立つ、たがいにつながりのある全体。

〔問題1〕

藤丸、藤丸さんというように、同一の人物について、書き分けがされていますが、その理由について、四十五字程度で分かりやすくまとめなさい。

〔問題2〕

① いろいろな生きものの生き方をたくさん勉強するのいいと思う。とありますが、筆者がそう思うのは、どのようなものの方ができるようになるからでしょうか。〔文章1〕の表現を用いて、解答らんに合わせて四十字程度で答えなさい。

〔問題3〕

次に示すのは、〔文章1〕と〔文章2〕についての、ひかるさんとかおるさんのやりとりです。このやりとりを読んだ上で、あなたの考えを四百字以上四百四十字以内で書きなさい。ただし、下の条件と〔きまり〕にしたがうこと。

ひかる ———— 〔文章1〕を読んで、「ちがい」ということについて、

いろいろと考えさせられました。

かおる ———— 「ちがい」という言葉が直接使われてはいませんが、

〔文章2〕にもそういったことが書いてあると思います。

ひかる ———— わたしも、みんなはそれぞれが感じていると感ずると

きがあります。

かおる ———— 学校生活のなかでも、「ちがい」を生かしていった方が

がよい場面がありそうですね。

条件 次の三段落構成にまとめて書くこと

① 第一段落では、〔文章1〕、〔文章2〕それぞれの、「ちがい」に対する向き合い方について、まとめる。

② 第二段落では、「ちがい」がなく、みんなが全く同じになってしまった場合、どのような問題が起こると思うか、考えを書く。

③ 第三段落では、①と②の内容に関連つけて、これからの学校生活のなかで「ちがい」を生かして活動していくとしたら、あなたはどのような場面で、どのような言動をとるか、考えを書く。

〔きまり〕

○ 題名は書きません。

○ 最初の行から書き始めます。

○ 各段落の最初の字は一字下げで書きます。

○ 行をかえるのは、段落をかえるときだけです。

○ 、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じように書きます。(まずめの下に書いてもかまいません。)

○ 。と」が続く場合には、同じまずめに書いてもかまいません。この場合、「。」で一字と数えます。

○ 段落をかえたときの残りのまずめは、字数として数えます。

○ 最後の段落の残りのまずめは、字数として数えません。